

様式 7 (Form 7)

学 位 論 文 要 旨

Dissertation Abstract

学位請求論文題名 Dissertation Title

The Implementation of Community Policing in Indonesia

(和訳または英訳) Japanese or English Translation

インドネシアにおけるコミュニティ・ポリシングの実施に関する研究

Human and Socio Environment - Studies 専 攻 (Division)

氏 名 (Name) Intan Fitri Meutia

主任指導教員氏名 (Primary Supervisor) Prof. Haruya Kagami

(注) 学位論文要旨の表紙

Note: This is the cover page of the dissertation abstract.

要旨

本論文は、インドネシアにおけるコミュニティ・ポリシング実施の実態を描き出し、警察と近隣コミュニティの関係のあり方を分析し、今後の警察のありかたに見通しを与えることを目的とする。分析・考察においては、日本におけるコミュニティ・ポリシングの歴史と実態を、比較対象の素材として用いる。

本論分で用いるデータは、筆者自身が実施したインタビューで得られた定性的なデータを主とする。それをもとにコミュニティ・ポリシングの現場レベルの実態を民族誌的に記述し、その実態を考察する。それにもとづく筆者自身の分析によれば、コミュニティ・ポリシングの有効な実施には、警察とコミュニティの両方からの積極的な参加が必要であることが明らかである。インドネシア警察は *bhabinkamtibmas* (コミュニティ巡回警察官) を設置することにより、コミュニティ・ポリシングの現場レベルでの実施を展開している。これは、各住民区域にひとりずつ割り当てられて、犯罪予防的役割を果たし、地域社会への脅威の早期警告を提供することが期待されている。

一方、インドネシアは多民族国家であり、ちょっとしたいさかいを含めた民族紛争がコミュニティ・レベルで頻発している。その要因にはいくつかあるが、警察の能力の不足、経済的要因、民族間の慣習の違いなどがあげられる。筆者の見解では、こうした民族間紛争にもコミュニティ・ポリシングは有効である。それは民族の慣習の違いに配慮した犯罪予防や調停が、より有効に働くと期待できるからである。しかしそのためには、*Bhabinkamtibmas* (コミュニティ巡回警察官) や FKPM (警察・地区住民フォーラム) といった制度は、法的意識と社会発展を増大させるために地元の知恵と調和を計りつつ、発展・普及させていくことが不可欠と考える。

キーワード

コミュニティポリシング, インドネシア, エスニック

Abstract

This thesis formulated objectives distress on describes and analyze the community policing implementation by examining the history and the present situation towards the role of police and its relation with community neighborhood in Indonesia. It was compared and analyzed the potential problems and challenge in applying and maintaining police strategies approach and public social order. Additionally, this study refers to community policing implementation in Japan as comparative information. Furthermore, it will examine the possibility of community policing approach in ethnic conflict resolution cases in Indonesia. This study is expected to offer as a reference for further research in analyzing the relation between police officers and community demands for the community policing implementation.

Data gaining was conducted qualitatively, in the form of ethnographic study by using interview, observation and documentary, which were done purposefully. The result of this study showed that the community policing ultimately needed active participation from both police and community. It was found that Indonesia has implemented community policing firstly by establishing *bhabinkamtibmas*. It is a representative of Indonesian police officer, which is assigned in each foster area due to, preemptive, preventive, and provides early warning of a threat to the community. Meanwhile, Indonesia as multiethnic differences has own challenging characteristic to prevent ethnic conflict. Massive destruction frequently occurred because of some factors; lack of police performance, economic factors, and the difference local wisdom. I emphasize that even though policing system running well, it should be modified appropriately. *Bhabinkamtibmas* and FKPM approach should be harmonized with local wisdom for increasing the legal awareness and community development.

Keywords: Community policing, Indonesia, ethnic.

学位論文審査報告書

平成28年7月12日

1 論文提出者

金沢大学大学院人間社会環境研究科

専攻 人間社会環境学

氏名 Intan Fitri Meutia

2 学位論文題目（外国語の場合は、和訳を付記すること。）

The Implementation of Community Policing in Indonesia

(邦訳) インドネシアにおけるコミュニティ・ポリシングの実施に関する研究

3 審査結果

判定（いずれかに○印） 合格 ・ 不合格

授与学位（いずれかに○印） 博士（社会環境学・文学・法学・経済学・学術）

4 学位論文審査委員

委員長 鏡味 治也

委員 西本 陽一

委員 大友 信秀

委員 高橋 涼子

委員 大貝 葵

委員

（学位論文審査委員全員の審査により判定した。）

5 論文審査の結果の要旨

本論文は、インドネシア警察による「コミュニティ・ポリシング」実施状況について、筆者自身による現地調査での聞き取りと観察からその実態を生き生きと詳細に記述し、その成果と問題点を指摘したうえで、その意義と定着に向けての改善策の提言を提示したものである。コミュニティ・ポリシングとは、警察が地域住民と連携し、その協力を得ることで問題の発生や拡大を予防し、地域の治安を維持していこうとする方策で、近年世界的にその導入が試みられている。インドネシアでは2000年代に入ってインドネシア国家警察が策定した、組織改革のためのGrand Strategy 2005-2025において、コミュニティ・ポリシングがその重要な施策のひとつとして明確に位置づけられている。

序章で問題設定と文献レビュー、調査手法の説明を行った後、1章では文献をもとに世界の警察の歴史を概観して、近年のコミュニティ・ポリシングへの注目の由来を紹介し、米国、日本、オーストラリア、インドネシア、インドの事例を文献やインターネットからの既存情報をもとに例示している。

2章ではインドネシアにおける警察組織の歴史を概観し、現在の国家警察の組織構成を紹介する。そして長期にわたって独裁的な支配体制を敷いたスハルト大統領が退陣し、スハルトを支えた国軍の一部だった警察が、そこから独立して国家警察組織になり、より国民の信頼を回復しその協力を得るために策定した改革策であるGrand Strategy 2005-2025を紹介し、その中にコミュニティ・ポリシングのインドネシアにおける実施の試みが重要な施策として位置づけていることを提示している。

3章と4章は著者自身のフィールドワークにもとづいてコミュニティ・ポリシング実践の実態を描写し、その成果と問題点を指摘したもので、本論文中でもっとも学術的貢献を主張できる部分である。まず3章では警察組織におけるコミュニティ・ポリシングの末端レベルの実行者であるコミュニティ秩序指導育成官 (*Bhabinkamtibmas*) に注目し、その日々の活動を実際に追うことで、彼らがいかにコミュニティの要人や情報源となる知人と接触し、情報を収集しつつ秩序維持と犯罪発生の予防・予知に努めているかを描写する。彼らは日々の見回りを行うだけでなく、学校や地区の各種団体の会合にも参加し、講演や講習を行う。こうした警察からのアプローチは、コミュニティ住民におおむね肯定的に受け取られているが、多くの警察官がいぜん高圧的な態度で住民に接することや、改革を迫られる警察の現状とそのなかでの自らの役目をしっかり認識していない者もいること、また犯罪行為の発生を告げてもすぐには対処し

てくれないことなどに不満を抱く住民も多いとしている。そのいっぽうでこうしたコミュニティ・ポリシング施策の副産物として、コミュニティ開発に警察が力を貸す例も現れていることを、著者は実例をもって報告している。本章で提示された、担当コミュニティを回る警察官の活動は、そのメモ帳や上司への報告書までも引用しつつ具体的に描写され、データの信頼性は高く、警察活動様態の実地調査報告として高く評価できる。

4章ではコミュニティ・ポリシングの別の施策として、警察・コミュニティ相互協力会館と警察・コミュニティ相互協力フォーラムに焦点を当てる。前者は日本の交番をモデルに、JICAの協力でジャカルタ近郊にモデル的に実施されている事例の紹介で、施設・設備や構成員を紹介している。後者は警察と地域コミュニティが協力して治安維持活動を行うために設置された組織で、著者はランブン州の事例を紹介しつつその活動内容を提示している。ランブン州ではそうした組織は州の先住民であるランブン人の話すランブン語の名前で呼ばれ、村などのコミュニティが警察と協定書を結んだうえで組織され、警察の援助を受けつつ地域慣習を尊重し社会問題の自助的な解決を目指す。そうしたコミュニティ自体の主体的なかかわりがコミュニティ開発に直結するものであることから、本章後半ではコミュニティ開発について1節を割いてその理念と内容を検討し、さらにコミュニティ・ポリシングの先駆例であり見本であると著者が位置づける日本の事例を、とくに交番や駐在所に焦点をあてて紹介し、インドネシアの事例と比較している。

5章は2012年にランブン州で発生した先住民のランブン人と移民のバリ人のあいだの民族紛争をとりあげ、その和解の過程をコミュニティ・ポリシングの実践例と位置づけて検討している。ランブン州における国内移民政策の経緯と、ランブン人およびバリ人それぞれの民族特性を概観した後、14人の死者と166の家屋の焼失をもたらした事件勃発後の経緯を辿り、その和解調停の過程でコミュニティ・ポリシングの手法が果たした役割を効果的だったと評価している。そして終章では本論での議論をまとめたうえで、コミュニティ・ポリシングの受容と定着に向けた実践上の改善点を提言している。

インドネシア警察の改革の中で国民の信頼回復は第一の課題であり、そのための方策としてコミュニティ・ポリシングは有効であり、また多民族国家インドネシアにおいて地域慣習を尊重しつつコミュニティと連携した治安維持が効果的であることは、本論を通じて著者の強調するところであり、それはじゅうぶんに説得的である。その達成への著者自身の願いが強いためか、事例の肯定的な評価が前面に出ている印象を受け、また日本の警察との比較が、双方の国

の社会事情の違いから、隔たりの大きいものを比べているため、インドネシアの事例分析にさほど役立っていない点は惜しまれるが、自身の実地調査にもとづく具体的な地域現場での警察の活動描写やそこでの成果と問題点の指摘は信頼に足るものであり、警察の現場での実態調査という類例の少ない研究として高く評価でき、審査員一同学位授与にふさわしい内容の論文と判定した。

以上